

松坂健

『私のハードボイルド』と

対をなすアメリカ紀行

二〇一一年の秋はミステリ研究文獻の大豊作だった。ハードボイルドミステリから本格推理まで、「深さ」と「怪やかさ」という難しい組合せを実現させた本ばかりで、とても機嫌である。

まずは、小鷹信光氏の『アメリカ・ハードボイルド紀行』。あの大作『私のハードボイルド』固茹で玉子の戦後史」と表裏一体となる本で、五十年以上にわたる著者とアメリカの係わり方を、全米五十州のすべてに足跡を残すという偉業（本場にそう思う）の裏付けをもって語ったものだ。

これは大げさでなく、日本のミステリ研究論文が英訳されたとして、英米文学系で博士号をとれるほどのものと言え、乱歩の『探偵作家としてのエドガー・ポー』（『幻影城』所収）か、小鷹さんの『私のハードボイルド』かと思っているのだが、小鷹さんのアメリカ研究が膨大な文献探索と実地見学の上に立脚していることをあらためて知ることができた。

この紀行は「今」を反映して、アメリカの原子力核爆弾実験の検証から始まり、実験地に近いモニュメント・バレー行き、その後者は紀田さんのホームグラウンド、奇妙幻想文学のエッセイをまとめたもの。この分野は一九六〇年代後半から七〇年代にかけて起こった怪奇幻想ものの復刻ブームで、ジャンルとしての位置がきちんと定まったように思う。紀田さんはこの頃からアンソロジーや解題担当者として、僕たちの蒙を啓いてくれていて、その当時の文章がたくさん収められている。あの頃、貪るように読んだものも多くあって、時代の熱気が伝わってくるようだ。



『アダムス・ファミリー全集』
チャールズ・アダムス、H・クヴィン・ミゼロツキ編 (Charles Addams: the Addams Family: an Evolution, '10) 安原和見訳/2,310円/河出書房新社



『謎解き名作ミステリ講座』
佳多山大地/1,785円/講談社



『乱歩彷徨 なぜ読み継がれるのか』
紀田順一郎/2,000円/春風社

して小鷹さんを決定的にアメリカマニアにした西部劇の話に移行する。そこからブルマガジン、メンズマガジンの生熊史、そしてフォークナー、ハメット、クラムリーと彼が愛する作家の聖地巡礼に発展する。

とにかく、旅行の仕方が半端ではない。アパラチア山脈沿いにアメリカを南北で縦断する旅の紹介があったり、ルート66の制覇があったり、並大抵の旅ではない。これもぜひとも英訳して、アメリカのトラベル文学大賞（そんなのあるかどうか知らないけど）にノミネートさせたいくらいだ。

訪れた小鷹さんは、旅の途中でヨーロッパからやってきた「白いアメリカ」の子孫たちから、いわれないハラスメントを受けたたりしたことまで記している。それでも「法や慣習や人種差を超えて、個人の信念と尊敬を認め合う自由がもし失われていたら、この国はとうの昔に幻影の国になっていたにちがいない」と結ぶ。個人の信念と尊敬を認め合う。アメリカ・ハードボイルドミステリの精神の淵源もそれだ。

この数年、堰を切ったかのようにミステリや怪奇幻想の著作をまとめつつある紀田順一郎氏に、見逃せない新著二冊がある。

『乱歩彷徨 なぜ読み継がれるのか』と『幻想怪奇譚の世界』（松松社/一九九五円）のふたつだ。

前者、乱歩の方は「乱歩個人の足跡を近

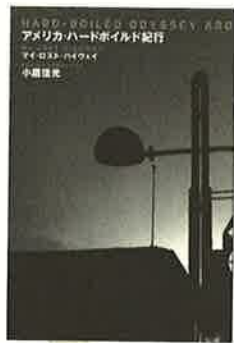
ミステリのガイドブックは汗牛充棟の観がなくもないのだが、佳多山大地氏の『謎解き名作ミステリ講座』は出色の出来映えと感心してしまった。

まずは扱っているミステリの幅が、「謎解き」と書名にあるにもかかわらず、広いところがいい。『幻の女』のNYにドジャース（大リーグ野球）への言及があったことと考察から始まって、東野圭吾の『容疑者Xの献身』まで、自由闊達に氣に入った作品を論じている余裕がある。そして、各作品解説の末尾にある「蛇足」コーナーの嫌みにならないトリビア披露など、とても楽しい。初心者のためのガイドブックというより、むしろミステリを「読み草隊列」ファンのための精力回復剤として有効！以下はミステリ関連書の短評集。誌面に限りがあるため、お許しを。

森博嗣『つばやきのクリーム』（講談社/一五七五円）は理科系ミステリ作家といわれる著者の人生観・生活観についての眩きを集めたもの。ご本人いわく「身も蓋もない」眩きばかり。反省する暇があるなら、対策を練る方が賢い、みたいな逆説的な警句がたくさん。面白いです。

覆本秋『図解でわかる！エンタメ小説を書きたい人のための黄金パターン100』（アスペクト/一五七五円）は、さらさらめくっていると、予想外に面白い。娯楽小

小鷹信光/2730円/研究社



『アメリカ・ハードボイルド紀行』マイ・ロスト・ハイウェイ

代という枠組みの中で、時代精神史として把握するような評伝は意外に少ないように思われる」として書き上げたものだ。

乱歩伝はどうしても「異端の文学」的な角度から照明が当てられてしまいが、紀田氏は、少年ものから戦後のミステリ研究・評論活動のほとんどをリアルタイムで体験したこと、時代共有意識を武器に、「時代を超越した人間の暗い、鬱屈した情熱を探り当てた」乱歩が、どのように「社会性」を獲得していったかに着目する。僕も乱歩の真の姿は「偉大なる読者」であったことだと思うので、戦後の研究活動を跡づけた後半はとくに読み応えがあった。こういう労作に注文をつけるなど無謀なことだが、できれば乱歩が本気で自作のアメリカ進出を夢想していたらしい、彼なりの「国際性」についても触れて欲しかったなあ。

説の様々なパターンを100に分けて、それぞれ解説を右ページに、左ページにパターンの構造を明示し、どこが「勘所」かの指摘をするという趣向。このパターンでエンタメ小説を書けるかどうか、品質保証はしかねるが、なるほど、こんなパターンがあるのかと知るには便利だ。

湯本豪一編『帝都妖怪新聞』（角川ソフイア文庫/七四〇円）は、明治時代の新聞に掲載された怪奇妖異譚を現代訳して挿絵とともに復刻したもの。笑えるエピソードが多く、ホラー・ファンタジー系の作家たちのネタ帖の趣も。

L・ソールズベリー&A・スジョ『偽りの来歴』（白水社/二七三〇円）は9月号で紹介した『FBI美術捜査官』と同じく名画偽造の世界を描くノンフィクション。こっちは名画そのものの偽造ではなく、来歴書を偽造するという手口。まこと人間の悪知恵というのには限界がないものと納得。さて、最後にこの秋、僕にとっての最高のプレゼントになった本について。

チャールズ・アダムス『アダムス・ファミリー全集』がそれ。とてもとてもイリー（不気味）なファミリーの何の変哲もない日常のコミカ漫画集。じっくり眺めて、じわじわ笑いがこみあがってくる。この楽しさ、とにかく最高。ミステリファン必携であります。